



酒田市／最上川河口

海の端さえ間近にせまる 庄内の秋は夕暮

 庄内銀行

Cradle

美しくなつかしい、日本をのせて。
「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

2013 September/October
平成25年9月1日発行(隔月奇数月発行)第4巻1号(通巻19号)

発行/Cradle事務局 山形県酒田市山王町8-15 [株式会社 出羽庄内地域デザイン] 電話0235(64)0888
制作/Cradle編集部 山形県酒田市赤田2-59-3 [コソウ・コーポレーション] 電話0234(41)0012

美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
本間美術館を
訪ねて
庄内憧憬
佐藤真生 画家

「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

9

2013 September/October
TAKE FREE
NO.19

酒田の砂浜に流れ着く漂流物で見知らぬ異国を想像していた少年時代。自分の中の「故郷」を実感した時、初めて画家としての道が開かれました。

時代や人が変わっていくように、故郷もまた変わっていきます。しかし、自分の故郷に対して特別の思いを抱き、「自分が子どもの時代はよかったなあ」と思っている人は多いのではないだろうか。私が育った故郷の風景も随分と姿を変えてしまいましたが、故郷に対しては今も特別な思いがあります。子どもの頃は、まだ学習塾など

彼方にある見知らぬ異国の人々の生活を想像して楽しんでいるような少年でした。今思うと庄内浜が私の最初のアトリエだったといえるでしょう。

ないのんびりとした時代でしたから、4歳上の兄や近所の友人たちと暗くなるまで遊ぶ毎日でした。家から自転車で10分ほど行けば海が広がり、丘の上に白い灯台があるその砂浜には、いろいろなものが漂着しました。流木やガラス瓶、ロシア語やハングル文字が書かれたプラスチック容器、見知らぬ深海魚の死骸など…。

しかし美術に興味を持ち始めた高校時代になると、画家を目指す青年の美術的欲求を満たしてくれる環境は庄内に少なく、目指すは東京、パリ、ニューヨークと、ひたすら故郷を出ていくことばかり考えるようになりました。その後、東京の大学に進学すると、まさに「水を得た魚」のごとく美術に関する最新の世界に触れ、あらゆるものを吸収しながらひたすら制作に打ち込む、夢のような毎日を送ることができました。

私は、砂浜を散策しながら新しい発見するのが好きで、漂流物を手にしながら日本海の水平線の

魚の死骸など…。

していく一方で、自分が向かうべき美術の道は真っ暗でした。何をテーマにすべきなのかわからず、目標もないまま、焦りと不安を感じ、

自分に自問自答を繰り返す日々が続きました。

とうとう疲れ果てて故郷に帰ると、普段と変わらない家族が、慣れ親しんだ手料理で温かく迎えてくれました。私は家族に感謝し、自分を取り戻すために一人で、子どもの頃遊んだ学校や空き地、公園、砂浜などをスケッチや写真を撮りながら何日もただ彷徨い歩きました。風を感じ波の音を聞きながら。

すると不思議なことに、徐々に身体の奥底の方から力が湧いてくるような気持ちになり、「この原風景の表現に取り組んでみたら…」と一つの答えを得ることができたのです。高校生の頃、あれほど退屈だと思っていた故郷から救われるとは、不思議な体験でした。そしてはつきりと自分の精神の「故郷」を実感することができた時、自分の画家としての道も開かれました。それは21歳の秋の決意でした。



佐藤真生「春暮譚」(1992)

9月8日(日)まで
武蔵野市立吉祥寺美術館で
「佐藤真生展 一家 HOME」を開催中。

さとう・まさお／画家。1969年、酒田市生まれ。東京学芸大学在学中に初個展を開催。以後、上野の森美術館絵画大賞展・佳作賞や安井賞展賞候補選出など数多くの受賞を重ね、国内外にて個展を開催。故郷では本間美術館で個展を1997年と2008年に開催した。油彩にとどまらず立体や映像、インスタレーションなど幅広く制作に取り組んでいる。

特集

本間美術館 を訪ねて

江戸後期、本間家四代光道によって
築造された本間家別荘「清遠閣」と庭園「鶴舞園」は、
今年でちょうど200歳の誕生年を迎えました。
「日本国民に伝統文化の鑑賞を通して日本人としての
自信を取り戻させたい」との趣意で、戦後、全国初の私設美術館として
市民に開放され、新たな歴史を刻みはじめてから66年。
歴史、自然、芸術が融合する美術館の歩みを訪ねました。

〈参考文献〉

『本間美術館の37年』財団法人本間美術館（昭和59年）

佐藤三郎著『酒田の本間家』中央書院（昭和47年）

月刊「SPOON」1997年10月号 特集「本間美術館探訪」

月刊「SPOON」2004年3月号「庄内庭園探訪12」

〈協力〉

本間家旧本邸、本間美術館顧問・高瀬靖さん、井山計一さん

Homma Museum of Art

戦後の人々の心を 日本の美と誇りで照らした わたしたちの美術館

日本一の大地主として歴史に名を残す酒田の本間家。
公益の志を映した「本間美術館」は、地方美術館の先駆けとして
地域の人々の心に寄り添いながら歩んできました。

特集

Chapter 1
本間美術館の歴史
Homma Museum of Art



1.京の風流が漂う木造2階建ての「清遠閣」。1階は上下座敷、茶室「六明廬(ろくめいろ)」。柱は最上質とされるヒノキの四方柱。天井も柱目で統一。2.3車寄せのある清遠閣入口。家紋を掲げた屋根は、千鳥破風入母屋造(ちどりばふいりもやつくり)の一字銅版葺き。4.庭園が面する上座敷はお客様をもてなす様式。前庭には、佐渡の赤玉石、伊予の青石などの銘石が置かれている。5.喫茶室は昔から憩いの場。6.「御座所(ござしょ)」にはアオガイ風ガラスやシルク製のシャンデリアを装飾。東宮殿下が宿泊された当時のまま。7.手吹きガラスの窓越しに眺める、優美な庭園。

出羽庄内に「公益」の精神を伝える酒田の本間家。その家督を三代光丘から継いだ四代光道は、地位と財を堅実に守りながら、蝦夷地との交易、新問屋と本間船の建造、日和山の整備など、地域と人々の生活に根ざした事業で先代の家訓を受け継ぎました。「『まちと共に歩む』が初代からの理念。先代たちはその思いで酒田を築いてきました」と話すのは本家のご当主、本間万紀子さんです。

光道は事業の一つとして、港で荷物の輸送や積み下ろしを行う「丁持」の冬場の失業対策のため、浜畑に別荘の築造を計画しました。そして文化10年に完成したのが、「清遠閣」と「鶴舞園」です。清遠閣は、江戸時代には荘内藩主酒井家の領内巡見の休憩所として、明治以降は貴賓や高官の迎賓館として利用されました。しかし昭和期に日本は戦災に見舞われ、やがて迎えた終戦。人々の暮らし

は荒れ、本間家の家名ですら没落の危機を迎えました。そんな中、本間家は私財を地域のために投じようと、別荘と庭園を美術館として開放することを決めます。

そして敗戦から間もない昭和22年5月。清遠閣と鶴舞園は、地域の期待を一心に集め、「本間美術館」として開館しました。設立趣意は「荒廃した人心を励まし芸術文化の向上に資する」こと。

戦後初の私設美術館として、本間家の別荘、庭園、ゆかりの美術品が公開されたことは、荒涼としたまちに一筋の光を示しました。もとが別荘の造りであるため、国宝級の美術品も豊敷きの座敷にむき出しで展示され、来館者は本物の芸術を目の当たりにすることができました。このことを作家の大宅壮一は、週刊朝日の連載「日本拝見」で「お座敷美術館」と紹介しています。

また開館翌年には、ヘレン・ケラーが「全国盲人大会」出席の折に来訪。数々の館藏品でもてなすと後に札状が届き、その書簡が今も大切に保管されています。

開館当初の展覧会は、後援団体の「酒田美術協会」が主となって企画されました。安井曾太郎、中川一政、土門拳、棟方志功など、第一線の作家の作品展に加え、地域の子どもの作品の発表の場であったのも特徴の一つ。現在の美術展覧会場が建つ前のテニスコートではまちの人々のレクリエーションが行われ、庭園では子どもたちが駆け回っていたことも、往時を語る思い出です。

昭和40年、本間美術館は財団法人を設立。本間家から美術品の寄贈を受け、古美術から現代美術までを有する美術館となりました。田中章夫館長は、今、地方の美術館が持つ役割を「都会でなくとも本物の文化を目にすることができるといえる」と話します。美術館が地域を創り、地域が美術館を育てる。その文化こそが、庄内が誇る風土といえるかもしれません。



1.大正14年、東宮殿下(後の昭和天皇)が酒田へ行啓の折、正門でお出迎え。殿下が滞在された清遠閣「御座所」の床の間の壁紙には、金箔を吹き付けた浮雲を彩色。2.今の美術展覧会場が建つ場所がかつてテニスコートで「子ども三輪車大会」(清水屋主催、昭和37年~)や、ダンスパーティなども開かれた。3.美術教育の一環「児童画展」は恒例の企画展として人気を集めた。4.六代光美の時代に花開いた酒田の茶の湯の文化は、昭和26年より、市民による各流合同の大茶会として受け継がれた。5.本物の美術に間近でふれられた贅沢な時代。

昨年1月、清遠閣を景観に含む「本間氏別邸庭園」として、国の名勝指定を受けた鶴舞園。鳥海山を借景に、南北に伸びる池泉を中心とした回遊式庭園で、その造園技術の質の高さでも知られています。作庭は、四代光道が師事した、俳人であり作家の常世田長翠の影響を受けているとされ、園内に足を踏み入れると、街中にあることも忘れるほど、豊かな自然と物語との出会いが待っています。「清遠閣の松からアカゲラの鳴声が聞こえてきたり、池乃端付近でカワセミに遭遇したことも。四阿の腰掛に座ってひと休みしていると、柀の芳香が漂ってきて、ここにいると時の経つのを忘れてしまいますよ」と話すのは、40年前から、庭園の撮影を続けている阿部辰修さんです。枯滝や太鼓橋など、庭園の中心をなす池泉を見渡すことができるのがこの四阿。傍には庭園内最大の赤松に柀の古木御影石の春日灯籠が、悠久の時を思い起こさせます。

園内にはアカマツやクロマツなどの針葉樹を中心に、モッコクやタブノキといった常緑広葉樹も多く、現在150種類以上もの木本と草本が確認されています。飛鳥が北限の赤紫色の実を付けるアケ

園も、ツツジ以外は花や実が控えめな樹木が多く、中でも成長が緩やかで、庭木として価値あるモッコクの存在が日本庭園としての風格を漂わせていますね。

10月中旬ともなれば、ニシキギやコマユミ、イロハカエデにチリメンカエデが色づき始め、築山周辺から四阿へと向かう小道は「もみじ通り」と称されるほどの紅葉の名所となります。「カエデの種類も多く、強風に耐え忍ぶかのように複雑に剪定された枝ぶりも興味深いですね」と土門さん。

清遠閣前庭の月見石から望む枯滝と沢飛び石、雪見灯籠。錦鯉の群れる太鼓橋や、伊勢物語に因んだ蓬萊石へ渡る八橋。そして、鶴舞園の名の由来とされ、鶴が舞い降りたと伝えられる中ノ島の松

風情豊かな景観と 大自然を凝縮した植生に 心ほどける「鶴舞園」

国指定の名勝「鶴舞園」は今年、築庭200年を迎えます。日本有数の庭園たるゆえんを、植生調査に携わった土門尚三さんと、庭園の撮影を続ける阿部辰修さんに伺いました。



1. ならかな築山から望む春。瀟洒な清遠閣に、萌える木々の緑が美しく映える。2. 苔の中からひょっこりと顔を出したマダケ。竹藪が京都風情を漂わせる。3. 「かきつばた水へも影を分けて咲く」其山(きざん)の俳号を持つ父・光丘の志を受け継いだ四代光道。4. 築山周辺から四阿へ向かう小道は「もみじ通り」と称される紅葉の名所。5. 降り積もる雪が見せる表情も趣深い。6. 池泉の向こうには残雪の鳥海山。白ツツジが初夏を告げる。

ビ科のムベ、ハイビヤクシンといった暖地性の植物が見られるのも珍しく、200年もの長い歴史の中で、人や風、鳥などの媒介により種子や胞子が運ばれてきた植物もあると考えられています。

その多様な植生は、衣装の如く庭園の四季を景観に映し出します。「桜が咲く前、木々の葉が黄色とも緑色ともつかない、まるで草萌えるといったような色に変わる。それがとても美しくての」と阿部さん。初夏には152株もの白ツツジが花開き、丁寧に刈り込まれた連山に粉雪が降り積もったかのような光景を見せてくれます。庭園の植生を調査した土門尚三さんは「花の見頃も美しいのですが、日本庭園は本来、花や実、果実がなる樹木を『なり下がるもの』として避ける傾向にあります。鶴舞

緑生い茂る木立には、諸国の銘石や32基もの灯籠が見え隠れし、庭園内の至るところで、風情豊かな眺めを楽しむことができます。

庭園内の植生も多様で、ハイマツのように剪定されたクロマツが植わる築山は、鳥海山の高山帯を思わせる「山地風衝草原」、東方の枯滝周辺には、悟りを開く境地を思わせる「深山幽谷」の植生。一方、イヌワラビやベニシダが繁茂し、水芭蕉や杜若が彩りを添える池泉周辺には湿地特有の「池沼」。植生が見られ、「庄内という境界を越え、大自然のさまざまな植生がこの空間に凝縮されていることが、鶴舞園の大きな魅力の一つでしょう」と土門さん。

季節はもちろん時間でも庭園の風景は刻々と変わっていく、と阿部さんは言います。「植物も日によって顔がありますよ。木々の隙間から射す光、流れる風も日々違いますから、撮影していても驚かされることが多いです」。

時を紡いできたその歴史に、多彩な植生が趣を深める鶴舞園。目を閉じ耳を澄ませば、庭園に秘められた豊かな表情が、もっと身近に感じられるかもしれません。

特集

Chapter 2
本間美術館の庭園
Homma Museum of Art



10 常世田長翠 菊図自画賛



6 蒔絵二重短刀箱
※国指定重要文化財



7 寛永風雛
雛祭古典人形展(白巽文庫コレクション)



9 初代歌川広重 湯殿山道中略図



8 三十番神像
※重要美術品



4 大井戸茶碗 銘酒井
※重要美術品



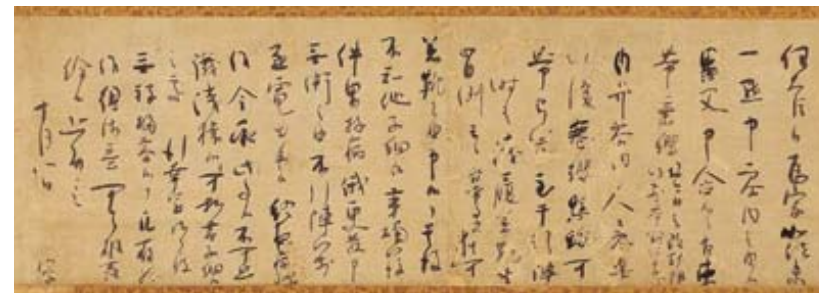
4 松尾芭蕉 玉志亭唱和懐紙
※県指定文化財



11 円山応挙 艶図
※県指定文化財



2 長次郎 黒楽茶碗 銘さび介
※市指定文化財



5 藤原定家 消息(十月八日)
※国指定重要文化財

中世、江戸から現代へ 時を超えて受け継がれる 日本文化の美の世界

特集

戦後、全国に先駆けて開館した本間美術館は、本間家からの寄贈品や個人からの寄贈品、収集品など約2700件のコレクションを有します。

Chapter 3
本間美術館
コレクション古美術品
Homma Museum of Art

1.江戸中期に京都で活躍した画家。写生を重視した応挙らしい作品。2.安土桃山時代を代表する楽焼の創始者。3.酒井家拝領の貴重な茶碗。4.元禄2年、芭蕉が酒田に滞在した折、近江屋三郎兵衛のところで書き残したもの。5.歌聖・藤原定家の直筆。もとは酒井家の伝来品。6.伊達政宗が秀吉の遺品として頂戴した鍋藤四郎の短刀のために作らせた箱。その後、箱が伊達家から本間家へ伝わった。短刀は將軍家光に献上。7.毎年美術展覧会場に展示される古典人形は、昭和39年に鶴岡の斎藤昌二(白巽文庫)氏のご遺族が寄贈したもの。斎藤氏は歴史資料、書画、美術品のコレクターだった。8.三十番神像は室町時代まで遡る稀少な品。9.江戸末期に活躍した世界的浮世絵師。10.本間家四代光道の庇護で酒田に定住した天明の四俳人のひとり。

ほか代表的な古美術コレクション

- 国の文化財
伊勢物語
市河文書
- 県の文化財
蕪村句稿貼交屏風 松村呉春筆
砧青磁浮牡丹花生
- 市の文化財
沢庵宗彭 三猿狂歌
司馬江漢 銅版風景図

コレクションについて館長の田中章夫さんに伺いました。「本間美術館は、本間家ゆかりの作品もありませんが、開館して66年目になりますので、展覧会した際に寄贈いただいたものや購入したものとあります。でも、重要文化財などはほとんど本間家の寄贈品なので、やはり柱は本間家ですね」。

酒井家や上杉家など、大名家からの拝領品はまさにその代表格。国や県の文化財も多く、各大家と親交を結んできた本間家の歴史を伝えます。「ただ本間家も幾多の危機に遭っているのです、全盛期に蓄積した美術品がそのまま伝わったわけではありません。どちらかといえば、残ったのは時代の中で淘汰されたもの。だから館蔵品をみれば本間家が何を大事にしてきたかがわかります」。膨大に残る古文書や書籍、そして俳書や茶道具。それらは、学問や公益事業に勤しみながらも酒田における俳諧や茶道の土壌を築いた、本間家の象徴です。「また本間家は江戸期に活躍した家なので、その時代の近世絵画も多くあります。開館後にも歴代の館長が、清遠閣が築造された江戸時代の絵画を充実させようと努力をしています」。

こうして時代を経るごとに増えた本間美術館の古美術コレクション。古きよき品に触れる喜びを田中さんは語ります。「館蔵品の中でも古いものは1300年前、新しくても100年以上前のものがほとんどです。そうすると、茶碗ならこれで千利休がお茶を楽しんだかもしれない、絵画なら昔の人はこれを観て何を感じたのだろうか、さまざまに想像が膨らむんですね。皆さんも美術館で本物に向き合っ、作品と時を越えた対話を楽しんでいただきたいですね」。

コレクションについては館長の田中章夫さんに伺いました。「本間美術館は、本間家ゆかりの作品もありませんが、開館して66年目になりますので、展覧会した際に寄贈いただいたものや購入したものとあります。でも、重要文化財などはほとんど本間家の寄贈品なので、やはり柱は本間家ですね」。

酒井家や上杉家など、大名家からの拝領品はまさにその代表格。国や県の文化財も多く、各大家と親交を結んできた本間家の歴史を伝えます。「ただ本間家も幾多の危機に遭っているのです、全盛期に蓄積した美術品がそのまま伝わったわけではありません。どちらかといえば、残ったのは時代の中で淘汰されたもの。だから館蔵品をみれば本間家が何を大事にしてきたかがわかります」。膨大に残る古文書や書籍、そして俳書や茶道具。それらは、学問や公益事業に勤しみながらも酒田における俳



7 プルーム・大野廣子 庭園



4 棟方志功 ポリサリノの女



2 中川一政による書



歴代の展覧会目録



8 岡部敏也 知秋 個人蔵



5 瑛九 旅人



8 佐藤十弥 装丁作品 個人蔵



9 小野幸吉 ランプのある静物A 個人蔵



6 増田洋美 PLAY THE GLASS

1.日本洋画界の巨匠・梅原龍三郎や安井曾太郎、日本画の大家・横山大観や東山魁夷、ゴッホ、ルオーなど、多くの名品が展覧会で紹介された。2.美術展覧会場前に掲げられている「本間美術館」の書は、美術館と親交が深かった中川一政のもの。3.昭和20年、25歳で戦死した酒田生まれの画家。昭和52年に「戦没画学生—岡部敏也遺作展」、平成9年に「岡部敏也日本画展—25歳のまなざし」を開催。4.20世紀美術を代表する世界的巨匠のひとり。昭和30～50年代に数度展覧会を開催。5.昭和32年発表のリトグラフ。瑛九の作品は145点収蔵。6.平成24年8月、本間美術館、酒田市美術館、土門拳記念館で個展「PLAY THE GLASS」を三館同時開催。7.平成7年、「大野廣子日本画展」を開催。その縁で鶴舞園を屏風絵にした。8.昭和57年の「佐藤十弥遺作展」出品作。郷土のデザイナー佐藤氏は美術館初期のポスターや目録をすべて担当。9.昭和5年に20歳で天逝した郷土画家。昭和24年、35年、45年、61年に回顧展を開催。

「企画展と作品収集を充実させて、全国に誇れる美術館を」という思いを映す。本間美術館の近・現代コレクション。

長年、本間美術館はコレクション収集とともに企画展にも力を入れてきました。かつては国宝級の美術品や中央で活躍する有名作家などの展覧会を数多く開催していた時代もあります。「当時こまごまの展覧会が可能だったのは、まだ全国的に美術館が少なかったこと、本間家の名前で美術館自体が注目されていたことがあります。でも一番は、初代館長本間順治さんと二代目館長の本間祐介さんが、企画展と作品収集を充実させて全国に誇れる美術館を、という熱い思いを抱いていたからだと思えますね」と田中館長さん。

その後も数々の企画展を開催。その度に展覧会を開いた作家から作品を寄贈いただいたり、購入したりしてコレクションを増やしてきました。「その中でも特に充実したのが戦後の前衛芸術活動、デモクラート作家たちの現代版画です。泉茂や巖嘔の版画も多くありますし、瑛九のリトグラフコレクションは全国屈指を誇りますね。」

全国区の芸術を紹介する一方で、郷土作家にも光を当ててきました。「三代目館長の佐藤三郎さんが、地方の美術館は郷土作家の作品収集と研究に力を入れるべきとお考えだったので、その視点は今も大事にしています。同時に私たちは今を生きているので、同時代の作家も紹介していきたいですね。」

現在は、学芸員の阿部誠司さんと須藤崇さんが企画展を担当しています。若き二人が起こした風は、新たな展示の見せ方。古美術、近・現代問わず、本間美術館のコレクションをいかに面白くわかりやすく伝えていくか、試行錯誤を重ねています。残暑が過ぎ、そよぐ風に秋の気配が漂う頃、本間美術館をそつと訪れてみませんか。

明治から平成まで 時代性と普遍性を備えた 近・現代アートの数々

特集

Chapter 4
近現代コレクションと
企画展

Homma Museum of Art

湊町酒田の秋を ゆっくり楽しむ旅

10/15火

13:07 酒田駅着 いなほ3
13:35 庄内空港着 ANA895
14:10 本間美術館
15:40 本間家旧本邸
16:30 旧鑑屋
18:30 会食「ロアジス」
宿泊：ホテルリッチ&ガーデン酒田

10/16水

9:00 土門拳記念館
10:00 酒田市美術館
11:00 出羽遊心館
12:00 お寿司「鈴政」
13:15 山王くらぶ
14:15 旧割烹小幡
(映画「おくりびと」ロケ地)
15:10 山居倉庫
16:30 湯野浜温泉「一久」(宿泊)
夕陽鑑賞
18:30 会食

10/17木

9:30 庄内藩校致道館
10:00 藤沢周平記念館
10:40 致道博物館
11:30 丙申堂
12:10 昼食「スカース」
13:10 鶴岡駅
13:40 庄内空港
14:20 庄内空港発 ANA898
14:46 鶴岡駅発 いなほ10

参加人数 **限定16名**
(最少催行人員10名)

ツアー料金 (おひとり様) **58,000円**
(税込) (サポーター割引) **56,000円**
(旅館「一久」は2名様1室料金)

申込締切 **平成25年9月30日(月)**

※現地より係員が同行します
※現地バス代・食事代・宿泊代等込
※庄内への往復交通費は含まれません

＜旅行企画・実施＞

株式会社 出羽庄内地域デザイン

〒997-0028 山形県鶴岡市山王町8-15

山形県知事登録旅行業第2-268号

0800-800-0806 通話料無料

e-mail: info@cradle-ds.jp

庄内クレードル 検索

●お申し込み・詳細はHPをご覧ください。

秋の庄内をご堪能ください

土門拳記念館 学芸員の解説あり



「古寺巡礼」の世界に誘います

「古寺巡礼」などで知られる酒田市出身の世界的な写真家土門拳の全作品を収蔵する日本最初の写真美術館。谷口吉生設計の建物、イサム・ノグチの彫刻、勅使河原宏の庭園も魅力に溢れています。開館30周年記念展は「古寺巡礼とっておきセレクション」

山居倉庫 ガイド付き



櫛並木は絶好の写真ポイント

明治26年(1893)に建造された米保管倉庫。現在も農業倉庫として使用され、西日を遮る櫛並木の景観は、JR東日本のポスターにも使われ有名。絶好の写真ポイントです。1棟が「庄内米歴史資料館」、2棟が「観光物産館・酒田夢の倶楽部」として公開。

庄内藩校 致道館 専門ガイド付き



東北唯一の現存藩校建造物

文化2年(1805)庄内藩酒井家9代目・忠徳公が創設した藩校で東北に現存する唯一の藩校建造物。多くの藩校が朱子学を教学とするなかで、徂徠学を教学とした数少ない藩校。「個性伸長」、「自学自習」を基本とし、質実剛健な教育文化を育む土壌となりました。

酒田市美術館 学芸員の解説あり



建物、庭もとても魅力的な美術館

日本洋画界の巨匠森田茂、酒田市出身の彫刻家高橋剛などの作品を常設展示。設計は日本芸術院会員の建築家池原義郎。芝生の庭には安田侃のモニュメントが置かれ、遠望の鳥海山との調和は見事です。特別企画展は「画家たちの自画像展」(梅原龍三郎など)

レストラン ロアジス



新鮮な海の幸をフレンチで

「食の都庄内」親善大使として活躍する太田政宏シェフは庄内のフレンチを長年に亘りリードしてきた第一人者。新鮮な日本海の素材を調理したフレンチは、多くの著名人から酒田にフレンチありと愛されてきました。その美味をゆっくり堪能ください。

湯野浜海岸の夕陽 ガイド付き



「日本の夕陽百選」の夕陽を心ゆくまで

10月は1年の中で最も夕陽が見られる確率が高い月です。二日目の宿泊は湯野浜温泉で人気の「海辺のお宿 一久」。「日本の夕陽百選」の日本海に沈む夕陽を心ゆくまで堪能いただき、豊富な温泉に浸り、ゆっくりとこころからだの疲れを癒してください。

本間美術館 田中館長の解説あり

本間家の別荘「清遠閣」は領内巡視の酒井侯を迎えるために建造されました。美術館は本間家伝来の美術品、作家・個人からの寄贈品など、国などの指定文化財を含む美術品から歴史資料まで収蔵・管理しています。田中章夫館長がみなさまを丁寧にご案内します。

本間家旧本邸 専門ガイド付き

本間家の三代光丘が庄内藩主酒井家のために幕府の巡見使宿舎として建造。ガイドの方がご案内します。また9月初旬～10月下旬は「お人形展」、本間美術館でも10月11日～30日に「後の雛」展を開催。

酒田は北前船で栄えた湊町。本間家旧本邸、井原西鶴の「日本永代蔵」に紹介された旧鑑屋など元豪商の館、元料亭「山王くらぶ」、映画「おくりびと」ロケ地ともなった旧割烹「小幡」などを巡り湊町、料亭文化を味わいます。また湊町

城下町鶴岡も訪れます。二日目は湯野浜温泉泊。日本海に沈む夕陽を見、温泉に浸り新鮮な海の幸を和食で楽しみます。庄内に生まれ、庄内大好き的小林編集長が、Cradleならではの企画でみなさまを少し贅沢な旅へとご案内します。

本間美術館の庭園を訪れると、いつも心がゆったりと落ち着きま



本間家旧本邸「伏龍の松」。樹齢400年を超える見事な赤松がお迎えます。

そして酒田のもう一つの魅力は、鮮な魚をいただくお寿司は絶品。さらにはその素材をフランス料理で味わうディナーは庄内のフレンチ第一人者太田政宏シェフが腕を振ります。今回は庄内のもう一つのまち、

＜庄内とっておきの旅案内人＞
Cradle 旅行倶楽部

私がみなさまを
ご案内
いたします。

Cradle 編集長
小林好雄

湊町酒田の秋を ゆっくり楽しむ旅

本誌特集掲載「本間美術館」を田中章夫館長が丁寧に
ご案内する特別企画。そして湊町酒田の秋を、Cradle旅行倶楽部
ならではの企画で小林編集長がご案内します。

本間美術館の庭園を訪れると、いつも心がゆったりと落ち着きま

酒田の新しい魅力、「土門拳記念館」、「酒田市美術館」を学芸員が案内

10月15日(火)
～17日(木)
16名様限定



庄内写真季行 14 湯殿山

豊かなブナ林に囲まれた中台池は、刻々と移り変わる大自然の中で、木々や鳥たちが息づく、静かな楽園。

標高715m、湯殿山スキー場のゲレンデを登った奥に、ブナ林に囲まれた中台池がある。森が新緑に染まる5月、池の景色は新たな命の息吹で静かに輝き始める。そしてじきに深い雪に覆われる12月、森は鮮やかな色へ一気

に染め上がる。池を半周した地から望む月山の姿も格別だろう。そんな景色を林道からそれた場所で撮影していると、鳥が私に気づいて飛び立つ時がある。だがその音に驚かされるのは私の方で、ひとり苦笑いしてしまう。

酒田方言あそび研究会の 酒田なつかしいろはカルタ

レトロでユニークな絵柄の取り札と、こてこての酒田弁が綴られた読み札。これは平成23年に発売された「酒田方言いろはかるた」の第2弾、「酒田なつかしいろはカルタ」だ。

手がけたのは、酒田方言あそび研究会。読み札はどちらも一般公募で集めたものだが、2作目は前作と違って酒田弁の収集が目的ではない。70代〜90歳代の生粋酒田人たちが「懐かしいと思う言葉」を集めたものだ。そのため2作目には「夜会式」「呉竹羊羹」など昔ながらの酒田の風習を偲ばせるものや、「いさばや(乾物屋)」「をげや(桶屋)」といった時代を映す言葉のほか、「ノミのー尋(少しずつ)」、「砂糖屋の前走ったようだ(甘さが足りない)」、「染め屋の明後日(ゆっくり)」など、聞き慣れない言い回しも含まれている。

代表の齋藤健太郎さんは語る。「もともと2作目を作るきっかけとなったのが、カルタを通してできたおばあちゃん友だちから『耳鳴り雀で聞きあざだ(うるさじ)』と言われたことでした。それ面白いですねって言ったら、こういうのは他にもいっぱいあると言われて。それで比喻を用いた言い回しを集めることにしたのですが、実際に2作目を作って実感したのは、昔の人たちの表現力の豊かさや頭の良さ、他者への気遣いですね。自分の感情をストレートに伝えるのではなく、気を利かされた言い回しを使うことで、人間関係を円滑にしていたと思うんです。生活の知恵ですよ」。

昔から言葉には言霊が宿るといわれる。「ヘンゲさのゝえつべ豆もて食べ比べ〜」CDから流れる脱力系セリフの数々は、面白いだけではない。



カルタは読み札CD付。特に第2弾の方は、同研究会が平成24年夏に開催した「読み手コンテスト」のグランプリ・準グランプリによる生粋の酒田弁です。ランダム再生でどうぞ。昭和30年代の暮らしをモチーフにしたイラストも酒田在住デザイナーによるもの。第1弾・2弾とも庄内各地の書店のほか、酒田夢の倶楽や本間家別邸「お店」、山王くらぶなどで販売中。

株式会社ブルー ☎0234-26-0089





山粧ふ

出羽の古道

六十里越街道を歩く

文月に入ってもまだ肌を刺すような強い日差しの中、見上げると、残る暑さと秋の爽やかさが行き合う空に出会う。夏から秋への移ろいを真っ先に感じるのは、空の高さなのかもしれない。

秋の空露をためたる青さかな — 正岡子規

日に日に秋が深まると、庄内平野は一面黄金色に染まり、山から竜田姫が裾野に降りてくる。恵みの秋は、私たちに多くの喜びを与えてくれる。秋の花々と話しながら、古から続く六十里越街道を歩いた。

沿いの本明寺には本明海上人、注連寺には鉄門海上人、そして大日坊には真如海上人が眠る。

白秋の散る静けさの注連寺 — あべ小萩

臥牛の背のごとくなだらかな月山の稜線の麓に、蕎麦の花の絨毯が広がる。白く可憐な花びらの中にピンク色の蕊が可愛らしい。この田麦俣には、当時の街道の宿場となった多層民家が、今も数軒残っている。美しい弓なりの描線と複雑に構成した茅葺き屋根は、兜造りである。田麦俣から先に歩を進めると、日本の滝百選にも選ばれている七ツ滝を見下ろす。街道沿いを歩くと、釣船草や溝蕎麦が足もとでささやきあう。露草もまた、凜とした姿で迎えてくれる。六十里越街道といえば、春先のブナの



六十里越街道は、千二百年前から出羽三山信仰の参道としての役割を果たし、全国に名を知られてきた古道である。十王峠手前のなごえ(斜面)に、一面に芒がたなびく。夕日に輝く芒は色なき風を黄金に染める。峠を下ると、注連寺の参道で萩が迎えてくれる。祖霊信仰の聖地である庄内には即身仏が多く、街道

根開け、雪椿やイワイチョウ、エンゴサクなどの季節もまた素晴らしい。志津までゆくと、五色沼がその水鏡に錦秋を映し出す。この辺りの古道では、山毛櫨、ナナカマドや朴の木などが、赤に黄に鮮やかさを競い、満ちた生命のかがりを燃やしている。

秋風の色を失ふ五色沼 — あべ小萩

この街道には、険しい道を往かなくてはならない場所もいくつかある。古の人たちは、何を思い、どんな祈りを捧げて、この険路を歩いたのか。今も変わらぬ「五穀豊穡」「子孫繁栄」への人々の願いがあるという。古来、出羽三山詣では、生まれ変わりの「三関三渡」を意味し、湯殿山はその総奥の院で「再生」の山とされてきた。街道をゆく行者にとって、ここは、死とは何か、生とは何かを考え、向き合う場所でもあったのだろう。

語られぬ湯殿にぬらす袂かな — 松尾芭蕉

湯殿山は、見るもの聞くものを語ることもなかれといわれ、芭蕉もそのことを句に残している。しかし、俳句はそもそも語らないものを表現しているのであり、芭蕉が「語られぬ」ということが何であるのかは、訪れた人のみぞ知り得るものかもしれない。多くの行者たちが踏み固



山毛櫨林

めえた悠久の参道、ここをゆけば、語られぬものが何を語っているのかを感じることが出来る。古の道は、そのことを今も私たちに語っているのだ。

写真・文|| 俵谷敦子「あべ小萩」(月刊俳誌「月の匣」同人)

Cradle 旅行倶楽部

山粧う六十里越街道を歩く

— 俵谷敦子と歩く出羽の古道

旧田麦俣分校集合(9時)↓弘法茶屋跡↓千手ブナ↓護身仏茶屋根(12時)↓細越峠↓笹小屋跡↓湯殿山参籠所(15時)↓湯殿山奥の院
◎約9キロメートル
上りコース標高差約640メートル

日時 10月24日(木)
場所 旧田麦俣分校(現地集合)
募集人数 限定16名様(最少催行人員10名様)
代金 3,400円(税込)
(お一人様) [昼食(おにぎり弁当お茶付)、帰りの車代込]
申込締切 10月17日(木)

※現地までの交通費は含まれておりません。
※現地より係員がご案内いたします。
※仙台、山形からのアクセス等、お気軽にご相談ください。

問合せ・申込先
0800-800-0806 (通話料無料)

旅行企画・実施

株式会社「出羽庄内地域デザイン」
〒997-0028 山形県鶴岡市山王町8-15

山形県知事登録旅行業第21668号